文部科学省

2010 年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

調査研究報告書Ⅱ

地域における青少年育成活動の可能性

「代官山ファンイン」による「お化けプロジェクト」事業における青少年リーダー育成と、
地域の多様な社会資源との協働の可能性に関する調査研究

2011 年 3 月

特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶや
調査研究委員会

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

１　　お化けプロジェクトのあらまし・・・・・・・・・・1

２　　お化けプロジェクトにおける青少年リーダー育成・・・4

３　　大人スタッフの役割・・・・・・・・・・・・・・・・7

４　　お化けプロジェクトを生み出したもの・・・・・12

５　　今後に向けた提案・・・・・・・・・・・・・・・・・15

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

調査研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

資　料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

はじめに

渋谷区の代官山は、この街を訪れる人々に“おしゃれで落ち着く大人の街”とイメージされている。しかし、この街に住む人々のところへ目を向けると、それとはちがった、人々が暮らす地域社会の姿が浮かび上がってくる。華やかな顔をもつ街も実は、そこで暮らす人々によって支えられているのである。

本報告書は、地域活動としておこなわれる、「お化けプロジェクト」という事業を取り上げて、そのなかですすめられる青少年リーダー育成の内容を明らかにすると共に、地域の多様な社会資源の協働の可能性について検討するものである。

1　お化けプロジェクトのあらまし

（1）お化けプロジェクトとは

お化けプロジェクトとは、青少年リーダー育成を目的として、大人と青少年が協力して、渋谷区立鉢山中学校の地下体育館（小体育室）のなかにお化けやしきをつくり、主に小学生までの子どもとその保護者などの住民が、地域社会の一体感を感じる、楽しいひとときを提供しようとする事業である。

毎年テーマを決めており、2010 年（第 5 回）のテーマは「地獄めぐり」である。このテーマのもとで、会場内に、亡霊の間、閻魔の間、針山地獄、血の池地獄、という 4 つのブース（区画）を配置した。また、お化けやしきの当日には、会場の入り口で、かき氷、カレーライス、焼きそば、などの飲食物の模擬店をひらいた。

入場者数は 3 日間で、920 人余（延べ人数）、アンケートの回答者数は、651 人である。このような大勢の入場者に対応するために今回から整理券を渡すことにした。

これを主催するのは、地元の代官山スポーツプラザで 2000 年から居場所づくりの活動を続ける代官山ファンインである。代官山ファンインは、区内 11 か所で居場所づくりの活動をすすめるネットワークの渋谷ファンインの一つである。

運営スタッフは、大人が 28 人、青少年が 38 人（うち中学生 19 人）である。また、協力団体として、たけのこの会、鉢山中学校学校施設開放運営委員会、青少年対策恵比寿地区委員会、鉢山中学校 PTA が参加している。

この事業は、2006 年に始まり、10 年まで 5 回おこなわれてきた（第 1 回から第 4 回までのテーマは、病院、学校、洋館、お寺）。開催日は毎年、海の日の前の金、土、日曜日の 3 日間と決められている。

2010 年の場合、以下のとおりのスケジュールですすめられた。

5 月 30 日、恵比寿南町会事務所に大人と青少年リーダーが集まって基本的な方向について話し合った。6 月 18 日、第 1 回お化けやしき会議が、鉢山中学校の木工室を会場に、募集に応えて集まった中学生も加わって開催された。これに続く第 3 回までの会議で、テーマ、内容、作業分担などについて話し合い、決定した。初日の開場前には、区長、区議会議長、中学校長、地元の町会長などを招いてオープニングセレモニーをおこない、7 月 16 日から 18 日までの 3 日間、開催された。その後、8 月に青少年リーダーの反省会をもった。このように、およそ 4 か月間にわたる事業である。

この事業が誕生した経緯は以下のとおりである。地元の子ども会のたけのこの会が、毎年夏休みに渋谷区立猿楽小学校の校舎を使って、ばけばけナイトという、肝だめしなどの夜の行事をおこなっていたが、2005 年、小学校の校舎が耐震工事で使えなくなったので、鉢山中学校の校舎を使用した。

このとき、たけのこの会育成会会長と、鉢山中学校学校施設開放運営委員会会長の 2 人は、中・高校生世代の地域活動をこれまで以上に活発なものにしようと考え、本格的なお化けやしきをつくる事業を計画して協力することにした。学校施設開放運営委員会会長は半年間にわたって役所の担当部局や町会などの地域住民団体に根回しをして同意を取り付けた。また、代官山ファンインの代表（学校施設開放運営委員会会長）、副代表（育成会会長）でもあったこの 2 人は、代官山ファンインと渋谷ファンインの人々にも協力を求めた。およそこのような経過をへて、お化けプロジェクトは始まった。

青少年リーダー育成を目的とするこの事業には類似の事業の系譜をたどることができる。それは、中・高校生の青少年リーダーを育てることを目的として、2004 年まで続いてきた、渋谷区教育委員会のジュニアリーダー研修会である。この事業がおこなわれなくなっていたので、「それに代わる、中・高校生を育てるためのモデル事業」（たけの

この会育成会会長）になることが期待されたのである。

（２）この事業の特徴

第一に、中学校の協力を得ると共に、幅広い大人のスタッフが参加していることである。

中学校は、地下体育館や木工室などの施設を 2 週間にわたって提供し、校内放送やチラシの配布による生徒の勧誘に協力している。

大人のスタッフは、主催団体の代官山ファンインのメンバーをはじめとして、PTA 関係者（OB を含む）、学校施設開放運営委員会関係者、青少年対策地区委員、町会関係者など、さまざまな人々である。この事業に協力する大人は、青少年育成者という立場の大人だけではないことが注目される。電気工事業、建設業（大工）、水道工事業などの人々は、職人の技能を生かして、お化けやしきの基礎的工事（体育館の床に柱を立てて壁を作る、電気の配線をするなど）を担当している。また、葬儀店、薬局、消防用品製造業などの地元の事業主や個人が、小道具や備品を寄付して間接にだが協力している。

第二に、子ども会のジュニアリーダー養成事業を引き継ぐ、青少年リーダー育成の事業と考えられていることである。

ジュニアリーダーは、子ども会などの青少年育成活動において、子どもと大人の中間に位置して、両者の橋渡しをする役割を担うことを、自分たちが成長するための機会としてきた。これを育てる事業がおこなわれなくなったあとに始まったこの事業は、ジュニアリーダー養成事業の空白を埋めるものと考えられた。この点からみて、青少年リーダーのなかに、区内の遠方の地区から参加する者もいることが注目される。

第三に、夏の風物詩として、住民のあいだに定着しつつあることである。

この事業を始めたばかりのころには「何をやってるの、子どもと一緒に遊んでいるの、という感じだった」というが、回数を重ねるうちに徐々に住民の受け止め方が理解あるものへと変わってきた。青少年リーダーと大人のスタッフの人数が増えたことや入場者の増加したことが、このことを示している。また、今回の入場者には浴衣姿の子どもたちがみられた。浴衣を着せて家を送り出した保護者の気持ちを想像すると、大人のスタッフのあいだで当初から期待されていた「夏の風物詩」（「オバケ屋敷プロジェクト実施メモ」2006 年）として認めら

れるようになったといえるだろう。

２　お化けプロジェクトの青少年リーダー育成

（１）青少年リーダーとは

お化けプロジェクトで活躍する青少年リーダーは、中学生から 20 代前半までの世代である。

これらは、およそ三層をなしている。第一に、本部長、副本部長、4 つのブースの全体を統括するブース長である。第二に、4 つのブースの各ブース長、副ブース長と、その他のメンバーである。なお、本部長をはじめとする役員は、大人のスタッフと青少年リーダーが相談して決めている。第三に、毎回募集に応えて集まる中学生である。

中心になって活動するのは前二者である。本部長、副本部長、統括ブース長は、リーダーシップを発揮する、年長のメンバーである。ブース長と副ブース長は、そのもとで各ブースを担当する、高校生世代である。中学生は、はじめて参加する者が多く、いわば見習いのような位置にいるが、毎年のテーマの決定には中学生の提案が第一に尊重されるし、また、お化け役、受付、入場する子どもの引率などを担当するという具合に、それぞれに役割を引き受けている。

お化けプロジェクトにおける青少年リーダーには、二つの注目される集団の性格がある。

その一つは、青少年リーダーのあいだの年齢差による、タテの関係である。

今回、前年までの副本部長が本部長になった。前年までの本部長は OB の立場で一歩退いて協力することになった。副本部長と統括ブース長も同じように交代した。このような役員の引き継ぎは、青少年リーダーの全体にわたるもので、小学生や中学生のときに参加した者が毎年活動を続けるうちに、ブース長や副ブース長を引き受けるようになる。年齢が上がり、経験を積むにしたがって、責任のある役割を引き受けるという仕組みである。オープニングセレモニーで挨拶した鉢山中学校長はこの点に着目して、この事業が学校教育におけるヨコの人間関係とは異なる、タテの関係を経験する貴重な機会になっていると評価している。

もう一つ注目されるのは、青少年リーダーが、計画の段階から評価

に至るまでの全過程をとおして主体的に参加していることである。

今回とりわけ注目されるのは、青少年リーダーが「チャレンジアシストプログラム 2010」（東京都教育委員会と BumB 東京スポーツ文化会館が主催する活動助成事業）に申請して、その助成を受けたことである。これによって事業経費の一部を、青少年リーダーが自分たちの力で確保することになった。

この点とかかわって、青少年リーダーの広がりについてもみておく。当初、たけのこの会の青年リーダー（ジュニアリーダー）が中心となって活動していたが、回数を重ねるにしたがって、この事業が始まってから参加した中・高校生世代も役員となり、リーダーシップを発揮している。

ここで、青少年リーダーがこの事業をどのように捉えているかを、本人たちのことばをとおして理解するために、チャレンジアシストプログラム第二次審査の公開プレゼンテーションに提出された資料「代官山ファイン『お化けやしき』」（パワーポイント）から抜粋して紹介する。以下のとおりである。

「お化けやしき」が生まれた背景

・もっと大きなことをしたい！　・中高生の活動の場をつくる

「お化けやしき」の特徴

・地域の大人たちの協力　・地域の中学校を会場

⇒　地域のつながり

「お化けやしき」のねらい

・年齢を超えた交流の場　・地域の大人との交流も盛んにできる

・心のつながる「居場所」をつくる　・達成感を共有

「世界」はどう変わったのか

・スタッフ　1 年目⇒20 人ほど　昨年度⇒50 人以上

・来場者も年々増加！

・地域のコミュニティがつくられる

⇒地域の活性化、青少年の育成

・大人が変わった！！

・この「居場所」を通じて

⇒　未来の地域の担い手となる

スタッフの生の声

・学べる！

ex）社会性が学べる！　発想が豊かに！

・コミュニケーション！

ex）たくさんの人とふれあえる！

・気持ち！

ex）みんな一丸となる！

・その他！

ex）いろいろな人に広めたい！　いつまでも続いて欲しい！

挑戦

・テーマを変えて新企画に…　・新メンバーを加えて…

・クオリティの向上を目指す…　・地域を深めることへの…

・広報活動への…

これをみると、青少年リーダーは、この活動を楽しみながら、大人と協力して、地域社会の活性化や地域社会の担い手となることを考えていることが分かる。

（２）青少年リーダー育成の特徴

第一に、楽しいとか達成感を感じるとかの感想にみられるように、この事業が青少年リーダーにとって居心地の良いところ（居場所）になっていることである。

青少年リーダーは、次のように語っている。「活動の魅力は、楽しいこと」「共同作業ができること」「年々レベルを上げていこうと頑張っている。最初は大人がふってきて流れでやっていたが、毎年意見をいって技術も上がった」「やっていることが、かたちになって、見える」。

その一方で、初参加の中学生のなかには、「こんなに汗をかくとは思わなかった」「部活などの予定があるので、毎日作業に参加することができない。出られる日だけ出ることにしている」と、いくらか戸惑う姿もみられる。今後継続した参加をとおして、その意識や参加の仕方が変わっていくことが期待される。

第二に、幅広い年齢の青少年リーダーが共に活動することによって、タテの人間関係から学び取るものが多いということである。

青少年リーダーは、次のように語っている。「この活動が惹きつけるものは、先輩後輩としゃべること」「魅力は、異年齢の交流ができること」「皆がついてきてくれた」「人の意見を取り入れたり、自分の考えを共有してもらうことができた」。

その一方で、「はじめてのことで、何をして良いか分からなかった」

という、リーダー初体験者の反省のことばも聞かれる。今後の活動によって自信をもつようになることが期待されることばである。

第三に、地域の大人と出会い、地域行事へ参加するきっかけをつかむ機会になっていることである。

青少年リーダーは、「地域の人に誉められると嬉しい」「（大人のスタッフは）もう一人のおとうさん、おかあさんみたい」と語り、大人のスタッフをはじめとする住民からの評価を実感している。また、ちょうどこれに応えるかのように、大人のスタッフのなかには、「まちで出会ったとき、元気に挨拶をする。自分の子どものようになってくれる」と語る人もいる。

地域行事には、えびすふれあい広場（5 月）、恵比寿駅前盆踊り大会（7 月）、恵比寿南町会夕涼み会（8 月）などがある。このなかで、恵比寿地区の町会連合会が主催する、恵比寿駅前盆踊り大会では、猿楽小学校百周年委員会や恵比寿南町会の屋台で青少年リーダーが活躍する姿がみられる。

3　大人スタッフの役割

（1）大人スタッフの役割とは

この事業に参加する大人のスタッフの範囲は広い。さまざまな大人が集まるが、一般の地域活動にみられるように関係団体に人数を割り振って組織的に動員するような方法はとらない。チラシをつくって、「お手伝いをしてくれる方を募集しています」と伝える。また、名簿はつくるが、会員制をとるわけではない。信頼関係にもとづいて、人から人へのつながりをたぐって人を集めるという方法である。

この事業に関わる大人は、三つのタイプに分けることができる。

第一に、代官山ファインの代表、副代表、事務局担当の 3 人である。この 3 人は、強力なリーダーシップを発揮して、中心になって活動する大人である。猿楽小学校や鉢山中学校の PTA 会長をそれぞれ経験している。また、いずれも教育委員会から委嘱される青少年委員をつとめている。

この 3 人の役割は、二つある。一つは、青少年リーダーが活動することのできる舞台をつくることである。もう一つは、活動の全般にわたる、大人のスタッフと青少年リーダーの支援である。

それを少し詳しくみると、以下のとおりである。

一つは、青少年リーダーが活動するための舞台づくりである。子ども夢基金などによる経費の確保やそのための書類づくりから、大人のスタッフの召集、広報、模擬店の準備、果てはお茶や弁当の手配に至るまで、実に多岐にわたる。お化けやしきをつくるための消耗品を住民団体から工面してもらったり、模擬店のために町会から鍋などの食器を借りたりもする。

もう一つは、事前の準備から終了後の後片付けまで、活動の全般にわたる支援である。計画段階の会議などで青少年リーダーに助言をするとか、作業に苦労する青少年リーダーを励ますとか、作業スケジュールの遅延を取り戻すために大人のスタッフに連絡するとか、ここでも、やるべきことは、きわめて多い。

第二に、そのほかの大人がいる。PTA 関係者、鉢山中学校施設開放運営委員会関係者、青少年対策地区委員、町会関係者などである。これらの大人は、お化けやしきの基礎的工事、模擬店の運営、受付、後片付けなどの個別の活動を担っている。

ここで仮に大人の範囲をうんと広げれば、小道具や備品を寄付する大人や、お化けやしきの入場者の大人などを含めることもできる。この人々は、直接活動にかかわるわけではないが、大人のスタッフに協力したり、青少年リーダーを励ましたりして、この事業を支えている。そのなかでも、町会をとおした各所の掲示板へのポスターの掲示は、地域ぐるみの支援の事例として、このような間接的な支援の方法を象徴するものである。

第三に、渋谷ファンインと特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶやの関係者である。渋谷ファンインは、先に紹介したように居場所づくりの活動のネットワークである。また、ピアサポートネットしぶやは、渋谷ファンインの活動から生まれた、不登校、ひきこもり、フリーター、ニートなどの青少年を支援する、恵比寿駅前に事務所を構える団体である。

この人々は、準備作業を手伝ったり、事業の相談に乗ったり、少し距離を置いたところから意見をいったりする。なかでも注目されるのは、ピアサポートネットしぶやのユースアドバイザーが、生きづらさを抱える青少年をお化けやしきづくりの作業へ誘うとか、活動の様子を映像に記録して青少年リーダーや大人のスタッフによる自己評価の手助けをするとかの方法で協力していることである。

その役割は、地域住民の大人のスタッフとは別の立場からこの事業

を支援することであり、そのことが同時に、この事業に広く一般的な意味のあることを明らかにするために役立っている。

（２）大人のスタッフの特徴

第一に、青少年リーダーが主体的に参加する仕組みをつくっていることである。

渋谷区内では各地区で、子どもの参加する行事がおこなわれているが、それらはいずれも青少年対策地区委員会の事業であり、お化けプロジェクトのように青少年リーダーが主体的に参加する活動とはいえない。そのようななかで、この事業は特別なものである。

お化けプロジェクトでは、先に紹介したように、当初から青少年リーダーが事前の計画の段階から評価に至るまで主体的に参加する仕組みを続けてきたが、それに加えて、回数を重ねるにしたがって、青少年リーダーがより一層主体的に参加する仕組みをつくるようにしている。それを運営の細かな点についてみると、物品調達と会計、中学生募集チラシ制作、アンケート集計など、可能な範囲で青少年リーダーにまかせるようになってきた。

第二に、大人のスタッフのなかで、中心になって活動する３人の大人（男性２人、女性１人）が、それぞれの持ち味を生かして協力していることである。

３人は、少年野球の監督、ジュニアリーダー経験者で現役の指導者、PTA の経験者と、その地域活動歴はさまざまである。また、それぞれに「体力勝負」「知的」「感情で動いている」と、ユーモラスに形容されるようにタイプがちがうという。そのせいで、青少年リーダーへの対応にもちがいがあるが、３人のあいだには、「ケンカができる」「細かいことは任せてくれる」という信頼関係がある。これは、PTA や町会や青少年育成などの地域活動をとおした、年月を重ねた日常的なつきあいによるものである。

この３人が熱心に活動するのは、地域の青少年の役に立ちたいという使命感や責任感だけでない。一つには、この事業が当人たちにとっても楽しいからである。「決められたことは、わくわくしない。新しいことは楽しい」ということばには、この事業が、一般の青少年育成活動にありがちな、行政依存、トップダウン、横並びの活動ではないことを示している。

もう一つ、熱心に活動する理由は、「地域行事をやったという快感、

充実感」ということばに示されるように、人と人のつながりの豊かな地域づくりを考えているからである。

この点とかかわって、大人のスタッフの一人は、この事業の目的について、「30年前のジュニアリーダーがPTA会長などで活躍している。種を蒔いておかないと30年後どうなるか」と、地域づくりを展望することばを語っている。この人は、高校生のときに地元のジュニアリーダーを組織し、「若者の祭典」（1964年～97年）という渋谷区教育委員会の事業にも積極的に参加してきた。このことばは、青少年リーダー育成による地域社会の担い手を育てることをとおして、地域づくりを追求しようとするものである。なるほど青少年リーダー育成はこのような長い時間の尺度で捉えるべきものなのだろう。

ただ、その一方で、もう一人のスタッフは、「30年後は考えられない」と語っている。この意見にも耳を傾ける必要があるだろう。それというのも、この30年余りを振り返ってみると、この地域は、1970年代のオイルショックの時期と、1990年前後のバブル経済の時期に大きく変化してきた。とりわけ大きく変化したのはバブル経済の時期である。1980年代までは社宅や個人商店もあったが、ほとんど引っ越していき、児童生徒の数も激減した。残ったのは、土地をもつ家業の人だけという証言もある。このような変化をみれば、30年後を見通すのは容易なことではないのである。

毎年夏に開催される恵比寿駅前盆踊り大会の情景は、地域社会の厳しい状況を象徴している。伝統行事の盆踊りを楽しもうとして恵比寿駅前に集まる大勢の人々は、地域活動とは縁のない地元住民や遠方から訪れる人々である。その一方で、会場を確保して櫓などを設営すると共に、会場の周囲に屋台や子どもの遊びコーナーを設けるのは、常日ごろ地域活動に参加する地元の人々である。この盆踊り大会の情景が教えてくれるのは、“おしゃれで落ち着く大人の街”というイメージの街は実のところ、決して数が多いとはいえない地域活動に参加する地元の人々の力によって支えられているという事実である。

30年後を考える必要のあることはまちがいないが、このような状況をみれば、30年後は考えられないとする立場を退けるわけにもいかないだろう。これは、大人のスタッフの役割について考えようとするときに避けて通れない深刻な問題である。

第三に、青少年育成者という立場の大人だけでなく、各人の職能を生かすという方法でこの事業に協力する大人のスタッフが参加していることである。

お化けプロジェクトが、体育館の床面に柱を立て壁をめぐらせるという本格的なかたちになったのは、中心的な大人のスタッフの電気工事事業者が、電気工事業、建設業（大工）、水道工事業などの人々の存在に着目して協力を求めたからである。これらの大人が参加することによって、大人のスタッフの幅が広がった。この人々は、青少年リーダーとのやり取りのなかでさまざまな提案をするようになるという具合に、作業を手伝うという受身の姿勢ではなく、青少年リーダーと積極的なかかわりをもつようになった。また、これによって、青少年リーダーが、青少年育成者だけでなく、職業人の顔をした大人と一緒に活動するという貴重な経験をすることにもなった。

地域活動に二の足を踏む大人であっても、自分の職能を生かした参加の依頼に応える人は少なくない。この事業における職能を生かして協力する大人の姿に、青少年育成活動へ参加する大人の幅を広げる知恵をみることができる。

第四に、渋谷ファンインとピアサポートネットしぶやの大人が参加していることである。

とりわけピアサポートネットしぶやという市民活動団体の関係者の参加が注目される。これには二つの意味がある。

一つは、地域住民団体と市民活動団体が協力して地域活動をおこなっていることである。住民の日常的な生活感覚にもとづいて活動する地域住民団体と、ミッション（使命、目的）を掲げて特定の分野の問題解決のために活動する市民活動団体は、それぞれ別個に活動する場合が多い。地域活動において、この二つの団体が協力するようになれば、それぞれの長所と短所を生かした活動が実現する。この点は、地域活動の活性化のために、とりわけ重要なポイントである。

もう一つは、一般的な青少年と、ピアサポートネットしぶやを利用する、生きづらさを抱える青少年へのはたらきかけが、一つの事業においておこなわれていることである。今回は、ピアサポートネットしぶやのユースワーカーと共に準備作業に参加した青少年がイラストを描いて受付の一番目立つところの看板をつくったり、開催日にピアサポートネットしぶやの利用者の青少年が連れ立って参加したりした。生きづらさを抱える青少年には、専門的な立場からの支援だけでなく、このような方法の支援も必要とされる。また、これは、一般的な青少年にとっても、同世代の多様な人間と出会い、人間理解を深めて、自由闊達に生きることができるようになるという、大きな意味のあることである。

４　お化けプロジェクトを生み出したもの

これまで主にこの事業に即して検討してきた。続いて、お化けプロジェクトが誕生した背景をみて、この事業の意義について整理するこにしたい。

（１）渋谷区の範囲の背景

①ジュニアリーダー研修会

お化けプロジェクトが始まった背景には、先に紹介したように、渋谷区教育委員会主催のジュニアリーダー研修会がおこなわれなくなったことがある。この事業は、それを引き継ぐものと考えられているが、お化けプロジェクトにおける青少年リーダー育成の方法は、ジュニアリーダー研修会とは大きくちがっている。

2004 年に開催された、ジュニアリーダー研修会をみると、中・高校生を対象に、講義（4 日、初台青年館）、宿泊研修（4 泊 5 日、檜原自然の家）、校庭開放研修（1 日、千駄谷小学校）という内容の事業である。宿泊研修やゲーム指導などの内容をみると、全国各地でおこなわれるジュニアリーダー養成事業と似たものである。

このジュニアリーダー研修会には次のような特徴がある。

・宿泊研修という非日常空間における活動
・講義、宿泊研修という分節化されたプログラム
・中・高校生に限定された参加者
・専門的指導者による指導
・主催は行政

ジュニアリーダー研修会と、お化けプロジェクトを比較して単純に優劣をつけられるものでもない。二つのタイプの事業が並存する場合も想定されるし、また、全国各地の事例をみれば、ジュニアリーダー養成事業が成果をあげているところもあるからである。しかし、それを前提とした上で、両者を比較すれば、お化けプロジェクトは、以下の点で、ジュニアリーダー研修会のプログラムから一歩前へ踏み出したものといえる。

・学校という地域社会と地続きの日常生活空間における活動
・分節化されたプログラムではなく、総合的な活動
・中学生から 20 代前半までの幅広い世代の青少年の参加
・地域の住民による指導
・主催は住民団体

お化けプロジェクトは、ジュニアリーダー研修会を引き継ぎながらも、日常生活におけるさまざまな体験の機会の減少などの地域社会の暮らしの変化に対応して、青少年リーダー育成の方法を新たに生み出した事業である。

②渋谷ファンイン

中心的な大人のスタッフの 3 人は、先に紹介したように、代官山ファンインの代表、副代表、事務局担当である。代官山ファインは、2000 年から代官山スポーツプラザを利用して、たまり場（第 1・3 水曜日と 2・3 木曜日）、ピンポンクラブ（1・3 水曜日）をおこなってきた。従来の青少年育成活動とはちがって、行政依存、トップダウン、横並びの活動ではない、この活動の経験が、お化けプロジェクトの一つのきっかけになったと、中心的な大人のスタッフは語っている。

また、渋谷ファンインの関係者は、お化けプロジェクトの立ち上げを支援し、その後現在に至るまで協力してきた。渋谷ファンインは、従来の青少年育成活動が低迷するなかで、居場所づくりという新しい方法を提案し、地域住民を幅広く組織する活動をすすめてきた。

なかでも、この活動を始めた社会教育指導員が、その後、渋谷区全体の青少年育成活動を調整する役割の青少年教育コーディネーターの職に就き、お化けプロジェクトの立ち上げを支援すると共に、継続してこの事業を支える役割を担ってきたことが注目される。

③『第 2 期渋谷区青少年育成審議会報告　渋谷区における青少年育成の課題とその解決の方途について』（平成 21 年 3 月 19 日）

この報告書は、お化けプロジェクトに言及するわけではないが、その内容からして、お化けプロジェクトの意義を追認し、後押しするものとみることができる。

報告書では、以下の七項目にわたる「具体的提案」をまとめている。

1.地域が協力して学校における体験的な学習活動の機会を広めよう
2.放課後や休業日の体験的な学習活動を広げよう
3.魅力的で体験的な学習活動の企画・運営ができる人材を育成しよう
4.人と人との交流を通した国際交流の機会を与えよう
5.青少年の力をまちのなかに発揮してもらおう
6.社会との関係に問題を抱える青少年の自立を総合的に支援しよう
7.青少年育成の取り組みを包括的に調整する体制を整えよう

お化けプロジェクトは、このなかの多くの項目を実現させたり、追求したりしている。この点に着目すれば、お化けプロジェクトは、渋谷区の青少年育成の課題とその解決の方向を考えるにふさわしい先駆的な事例ということができる。

（２）全国的動向にみる背景

次に、お化けプロジェクトが始まった背景を、青少年育成活動の全国的動向のなかに置いて検討しておきたい。

戦後、青少年育成活動が全国的規模で組織化されるのは、社団法人全国子ども会連合会や社団法人青少年育成国民会議の発足にみられるように、1960 年代半ばの高度経済成長期のことである。この時期には東京都においても、青少年委員制度が市区町村に移管され、それぞれの実情に合わせて、充実した活動がおこなわれることが期待されるようになった。

その後、1970 年代をへて、80 年代半ばには子ども会の会員数と団体数がピークに達するというように、青少年育成活動の体制は整えられてきた。ところが、それもバブル経済の崩壊したあとの 90 年代には、青少年と地域社会の大きな変化によって壁に突き当たり、活動が空転するようになる。

90 年代後半から全国各地に誕生する居場所づくりの活動は、非行対策と団体育成を二本柱にした、それまでの青少年育成活動の限界を意識した熱心な青少年育成者が、目の前の青少年の必要に応えて始めたものである。そして、渋谷ファンインの活動は、このような動向のなかで、居場所づくりの活動の代表的な事例の一つに数えられるものである。

ここで、2009 年に社団法人青少年育成国民会議が活動を停止したことを、青少年育成活動が転換した時代の区切りの仮の目印にすれば、それまでを前期青少年育成の時代と呼び、それに続く現在を後期青少年育成の時代と呼ぶことができる。こう考えると、90 年代後半に広がった居場所づくりの活動は、後期青少年育成の時代の到来を知らせるものだったといえるだろう。

このような全国的動向のなかに置いて、この事業をみると、1999 年の渋谷ファインをきっかけとして 2000 年に始まった代官山ファインによって、2006 年に開始されたお化けプロジェクトは、後期青少年育成の時代の注目される事例の一つとして評価することができる。

5　今後に向けた提案

（1）この事業に即した提案

まず、この事業に即して三点にわたって提案したい。

第一に、青少年や大人が参加しやすい方法をより一層工夫することである。

青少年の参加については、特定の分野の得意技をもつ青少年の参加が考えられる。お化けやしきプロジェクトは、美術、音楽、演劇などの広い範囲にわたる、総合的な表現活動である。たとえば、イラストの得意な者がポスターをデザインするとか、音楽の好きな者が BGM を担当するとか、演劇の好きな者がお化けの役を演じるとかいう具合に、特定の分野に関心をもつ青少年が活躍する場面は多い。このタイプの青少年の参加は、大人のスタッフが職能で参加するのと似ており、大人の場合と同じようにその後の積極的な参加も期待される。

もう一つ、生きづらさを抱える青少年の参加が考えられる。はじめて訪れる場には馴染みにくいだろうし、人間関係の相性の良し悪しもあるだろう。しかし、この事業ですでに試みられているように、ピアサポートネットしぶやのユースワーカーの支援などがあれば可能である。これがこれまで以上にすすめば、この青少年たちには、日ごろの限られた人間関係とは別の経験をするところになる。

このような工夫は、この事業の間口を広げたり、敷居を低くしたりすることである。青少年リーダーの力量が試されるし、大人のスタッフの見識が問われることにもなる。具体的な場面を想定すれば、負担が増すことになるので、無理をすることはないとはいえ、これがすす

むことによって、この事業が多くの人に開かれた、奥行きのあるものになることが期待されるのである。

大人の参加については、これまで地域の人間関係と縁がなく、地域活動に参加したことのない住民の参加が期待される。現在の大人のスタッフの多くは、長いつきあいによる信頼関係によって集まっている人々である。それとはちがうタイプの人々とのつながりを、新たにつくる工夫が必要とされるだろう。

第二に、個別の作業から全体の運営に至るまで、より一層、青少年リーダーにまかせるようにすることである。

これは、これまでにも着実にすすめられてきていることである。今後、回数を重ねて運営方法が整えられるにしたがって、青少年リーダーの活躍も容易になる。また、OB が増えれば、その力を借りることも考えられる。青少年リーダーにまかせるのは、大人のスタッフにとって、かえって手間のかかることになるかもしれないが、長い目でみれば、この事業を継続させ、活性化させることになるにちがいないのである。その場合、青少年リーダーの主体的な参加がすすむことによって、この事業のかたちが変わる可能性があることも指摘しておきたい。大人のスタッフは、それを想定しておく必要があるだろう。

第三に、地域社会の担い手を育てるというこの事業の目的とかかわって、地域社会とは何かを、青少年リーダーと大人のスタッフが共に考えることである。

地域社会の担い手を育てるというこの事業の目的については、これまでも考えられてきた。しかし、その場合の地域社会とは何なのかは明確になっていないのではないだろうか。地理的空間としての地域社会は一つだが、地域社会を一定の空間における人間関係のまとまりと捉えれば、地域社会は一つではなく、住民の考え方や属性によって複数の地域社会が並存するとみなければらない。そのような意味における複数の地域社会を視野に入れた上で、将来の地域社会像を描き出し、その担い手の姿について考えてみる必要がある。

（２）一般的な提案

次に、この事業の検討を前提として、青少年育成の行政施策と地域活動の一般的な課題について、三点にわたって提案したい。

第一に、中・高校生世代から 20 代までの世代を対象とした、青少年育成の行政施策と地域活動を考えて、それを始めることである。

そもそもこの世代を対象とした青少年育成事業が、きわめて少ない

ことが問題である。そのなかでも、まずもって、ジュニアリーダー養成事業に着目する必要がある。ジュニアリーダー養成事業は地域社会の担い手を育てるために、これまで重要な役割を果たしてきた。しかし、それが今日では、地域社会の担い手を育てるという本来の目的を見失い、かたちだけのものになっている。そうであるとすれば、青少年と地域社会の変化に対応した、地域社会の担い手を育てる方法を考えなければならない。

第二に、青少年育成者に限られない、さまざまな大人が青少年育成の地域活動に協力する仕組みをつくることである。

人々の働き方や生活の仕方は大きく変化している。そのようななかで、これまでのように中小事業主や家庭の主婦に青少年育成の担い手を期待することも難しくなっている。職能を生かすとか、余裕のある時間だけ協力するとかいう具合に、青少年育成の地域活動への大人の参加の仕方を広げる必要がある。

第三に、地域の多様な社会資源の協働が実現するような、青少年育成の行政施策をすすめることである。

行政施策の手法を改めることが、その第一歩である。人々が孤立する地域社会の現実をみれば、これまでのような関係団体に通知を出すとか、関係団体の代表を集めて会議を開くとかいったやり方で、行政施策が現実化するとは考えられない。比喩的な言い方になるが、地域を歩いて人や団体や活動を見つけることから始める必要がある。

そのためには、行政の枠組みから半歩だけでも踏みだす勇気をもって、行政と住民を結び付けたり、地域住民団体と市民活動団体の交流、協力をすすめたりする、中心的な世話役（キーパーソン）がいなければならない。また、その中心的な世話役が活躍するための団体が必要である。

おわりに

最後に、青少年育成関連施策の最近の動向をみて、この事業の意義について、あらためて確認しておきたい。

青少年が育つために地域社会の身近な人間関係は、なくてはならない条件である。それにもかかわらず、それが失われて、青少年も大人も孤立するようになっている。

このような状況を前にして、第 27 期東京都青少年問題協議会の意見

具申「若者を社会性をもった大人に育てるための方策について　―社会の絆の回復を目指して―」（2008 年 11 月）では、「若者の自立支援」から「社会の自立支援」への視点の転換を求めて、個人の自立ではなく、社会が人々を阻害しない状態（社会的包摂性）の回復を提案している。

また、子ども・若者育成支援推進法にもとづいて作成された、「子ども・若者ビジョン　～子ども・若者の成長を応援し、一人ひとりを包摂する社会を目指して～」（2010 年 7 月）においても、「社会全体で分野、主体の壁を越えて互いに連携、協力し」、「連携・協力を通じて、支え合いのネットワークから誰一人として排除されることのない『一人ひとりを包摂する社会』を目指す」と述べて、「包摂する社会」の必要を提起している。

このような提言等をとおしてみれば、お化けプロジェクトは、青少年リーダー育成を地域の多様な社会資源の協働によって追求することによって、一人ひとりが孤立することのない社会を実現させようとする、今日とりわけ切実な課題に応えるものである。

その活動が、消費社会の最先端ともいえる渋谷区の代官山という地域でおこなわれていることに着目すれば、広く一般性をもつ事例といえるだろう。

調査研究の概要

ヒアリング（2010 年）

（月　日）　（対　象）
6 月 10 日　青少年リーダー
6 月 18 日　大人のスタッフ　青少年リーダー
7 月 6 日　大人のスタッフ　青少年リーダー
7 月 18 日　大人のスタッフ　青少年リーダー
7 月 30 日　大人のスタッフ　住民
9 月 28 日　大人のスタッフ

収集資料

1.『翔　四半世紀』（若者の祭典 25 周年記念誌）記念事業推進 四半世紀委員会 1988 年
2.『’98 青少年育成ハンドブック』渋谷区 1998 年
3.「（特集）中高生のための居場所づくり――「渋谷ファンイン」の活動から」『青少年』2002 年 7 月号
4.相川良子「学校・家庭・地域・企業・NPO などのコラボレーションによる学校教育の充実と地域教育の再生」『教職研修』2004 年 4 月号増刊
5.『平成 16 年度 ジュニアリーダー研修の記録』渋谷区教育委員会 2005 年
6.『平成 16 年度 渋谷区青少年教育事業の記録』渋谷区教育委員会 2005 年
7.相川良子「渋谷区の『ファンイン』の事例」明石要一編著『子どもの放課後改革がなぜ必要か』明治図書出版 2005 年
8.阿比留久美「子どもの『居場所』の協同的創造　『渋谷ファンイン』におけるネットワークの原理」日本社会教育学会年報編集委員会編『NPO と社会教育』東洋館出版社 2007 年
9.「地域で作る［お化けやしき］大人と子どものコラボレーション」『渋谷区青少年委員だより』2007 年 3 月

10.松下浩市「地域をつなぐ」只木一行「おばけの話」『青少年委員実践記録集（2007・8年度)』2009年
11.『たけのこの会　設立30周年記念誌』猿楽地区有志子ども会「たけのこの会」育成会 松下浩市 2008年
12.只木一行「おばけやしきその後　恵比寿地区」『渋谷区青少年委員だより』2009年3月
13.『2008 代官山おばけ屋敷』（映像資料）2009年
14.『渋谷区における青少年育成の課題とその解決の方向について』第２期渋谷区青少年育成審議会 2009年
15.『文部科学省 2009 年度人権教育推進のための調査研究事業 調査研究報告書 「不登校・ひきこもり」を支援するピアサポート事業のあり方に関する考察』（文部科学省 人権教育推進のための調査研究事業）ピアサポート事業調査研究委員会 2010年
16.「代官山ファイン『お化けやしき』」（パワーポイント）2010年
17.『お化けやしき 2010』（映像資料）2010年

参考文献

1.『若者を社会性をもった大人に育てるための方策について　―社会の絆の回復を目指して―』東京都青少年問題協議会意見具申　2008年
2.『子ども・若者ビジョン　～子ども・若者の成長を応援し、一人ひとりを包摂する社会を目指して～』子ども・若者育成支援推進本部 2010年
3.『平成22年版　子ども・若者白書』内閣府　2010年
4.久田邦明「地域活動としての居場所づくり」『神奈川大学心理・教育研究論集　第27号』2008年
5.久田邦明「地域における青少年育成活動の現状と課題」『山梨学院生涯学習センター紀要　大学改革と生涯学習　第14号』2010年

資　料

1.渋谷区青少年委員だより 2007 年 3 月 15 日号
2.『お化けやしき』委員会のお知らせ（チラシ）
3.2010 年 夏 お化けやしき（ポスター）
4.青少年リーダーの活動（写真）

1. 渋谷区青少年委員だより 2007 年 3 月 15 日号

今年度も、各地区で様々な青少年を対象としたイベントが開催されました。その一部を紹介させていただきます。

新橋

氷川

大向

上原

西原

初台

本町

笹塚

千駄ケ谷

神宮前

代官山

青少年委員だより

2007.3.15

特集 恵比寿地区 お化け屋敷プロジェクト

渋谷区の各地区では、その地域性を活かし様々な青少年向けのイベントが開催されています。今回紹介する恵比寿地区のイベントの特徴は、スタッフとして子供会OBや大学生が高校生、中学生を起用し、小学生をターゲットにしているところです。そのスタッフを大人達が陰からサポートしています。地元の方々をも巻き込んだ3日間のプロジェクトを特集いたします。

打上パーティー

地域で作る【お化け屋敷】 大人と子どものコラボレーション!

●プロローグ

このイベントを呼びかけた「代官山ファンイン」は、青少年委員も関わり地元の中学生を対象に「居場所作り活動」をしています。その活動の一環として「自分たちでつくるお化け屋敷」を計画。また地域の子ども会「たけのこの会」や鉢山中施設開放委員会にも製作への協力や場所の提供をお願いしました。

●プランニング

地元の中学生を中心に参加を呼びかけ、6月下旬に第1回目の企画会議を行いました。最初に集まって来たのは中学生1人だけでしたが、回を重ねるうち一人が一人を呼び、話し合いも活発になっていきました。テーマも「病院」に決まりました。

●アイデア満載の会場づくり

次に鉢山中体育館での準備です。何もない体育館ではイメージできないメンバーも、通路のような通路ができ、小道具が揃ってくると俄然やる気を発揮し、ネットで調べたり様々なアイデアを出し合ったり、それを具体化していきました。

●皆からいただいた協力

学校のご理解に加盟のこと、「地域の子たちのために」と学校施設開放利用団体の承諾を得て、2週間にわたって体育館をお借りできました。作業には街の方が大勢来てくれました。施設開放委員の方が作業を見守り、体育館利用団体の電気工事屋さんや大工さんなど、技能を活かし協力してくれました。まさに子どもと大人のコラボレーションです。協力の輪は更に広がり、地域の町会長の方々、保育園・幼稚園・小学校もチラシ配付など快く承諾をいただきました。会場校の先生方、同校OBや在校生など様々な人たちから温かい応援をいただきました。

●オープニング

「来てくれるかな?」これは皆の心配でした。当日は小学生や親子連れ、また地域の方もたくさん集まってきてくれて、順番待ちの列ができるほどでした。通路約200人が続いてくい、休む暇もない程の大忙しでした。おもしろくて何度も入る子もいれると、実際にはその何倍もの人が楽しんでくれました。最後の人が出た後、皆からともなく「やったー!」と声があがり自然と拍手がわき起こったのが印象的でした。その後、そのまま片づけを行い、大人も子ども協力して約1時間で何もない体育館に戻すことができました。

同会式

●エピローグ

「青少年が街で育つきっかけづくり」としてお化け屋敷を行いました。ここに至るまでには、地域のお祭や盆踊りで手伝いする中高生の姿、子ども会のジュニアリーダーなど、街が育んだ小さな芽がありました。若者や中高生がやる気になり、やり過ぎることは手間も時間もかかります。しかし、回り道をしながらも、たくさんのことを体験的に学び感じ育っていくのです。今回のイベントは大人たちの心も熱くして大きなウエーブとなりました。

また、大きな達成感はどのメンバーからも感じることができました。視察した中でも丁寧に対応したり、怖い子の手を引いてあげるなど、どうしたらもっとお客さんが喜んでくれるかを研究している…そんな姿が印象的でした。また、子どもたちからも「中学生になったら(スタッフを)やりたい」という声も聞かれ、イベントの魅力だけでなく、身近な先輩としてよいモデルとなったようでした。

見かけはただの「お化け屋敷」ですが、地域人々の交流を広げるたくさんのねらいがありました。実際には予想以上の効果も多く、また予想外にたくさんの協力をいただき大成功を収めることができました。

(恵比寿地区　青少年委員)

完全密着お化け屋敷の舞台裏

電気工事や大道具作りはオッサンたちの出番です。

身の回りの素材を感性で活用した匠の作品群

細部にまでこだわった力作の小道具

こわいよ~ 泣き出す子続出!! お化け其利につきます。

代官山 ファンイン総合病院

お化けやしき

高校1年生(運営管理部)
やっていくうちにどんどん配置が変わっていった。プレッシャーもあったが、みんなと力を合わせてできたことがよかった。来年もやりたい。

中学2年生(オペ室担当)
友達と一緒にオペ室を担当した。中学生はうちらだけのこと、高校生、大学生、大人が優しく教えてくれた。また来年もぜひやりたい

高校2年生(ジュニアリーダー)
計画を立てるのも、作るのも楽しかった。子供たちも喜んでくれてよかった。

中学2年生
先輩に誘われて参加しました。友人と二人だけで心細かったけれど、最終的には大学生、高校生、中学生の仲間ができてとても楽しいものが作れたと思う。

中学3年生
鉢山の生徒だけでは参加しなかったと思う。消防さん、お姉さんがやさしく指導してくれた。

大学3年生
友人に誘われてきました。人数が少なかったけれども、よくやれた。参加できてよかった。ぼくは育ったこの街を大切にしていきたい。大学生になってできることを考えていたが、自分なりにがんばれた。横のつながりから縦のつながりができてよかった。今回は地域とのつながりができた。ありがとう。次回につなげていきたい。

平成２２年６月

―代官山ファンイン・たけのこの会・鉢山中施設開放運営委員会協同事業―

『お化けやしき』委員会のお知らせ

皆様のご協力とご理解により夏休みの３日間、鉢山中地下体育館において『お化けやしき』が開催されます。

この『お化けやしき』を一緒につくってくれる中学生を募集しています。おばけやしきをみんなで作りたいので、下記の通り企画・運営について話し合いを行います。是非お集まりください。

記

第一回お化け会議
平成２２年６月１８日（金曜日）　午後４時～６時
第二回お化け会議
平成２２年６月２７日（日曜日）　午後４時～６時
第三回お化け会議
平成２２年７月４日（日曜日）　午後４時～６時
※場所はいずれも鉢山中　木工室　　議題：企画・運営・その他

準　備　期　間
７月５日（月）～１５日（木）
場所：鉢山中学校地下体育館
時間：平日：１６時～１８時　　土日：午前中～１８時

『お化けやしき』開催日
＊７月１６日（金曜日）　１７：００～２１：００
＊７月１７日（土曜日）　１７：００～２１：００
＊７月１８日（日曜日）　１６：００～１９：００
（７月１８日は片付けと、反省会を行います。解散は２１：３０頃を予定）

主催　代官山ファンイン　　代表　只木　一行　090-____-____
協力　鉢山中学校
たけのこの会　　代表　松下　浩市　090-　　-
鉢山中施設開放運営委員会

3.　2010 年 夏 お化けやしき（ポスター）

２０１０年　夏

あつーい夏を涼しくする？

お化けやしき

代官山にトツゼン『お化けやしき』があらわれた。
楽しさいっぱい。こわさもいっぱい。
さあ、みんなで出かけよう！！

開催日

＊７月１６日（金曜日）　１７：００～２１：００
＊７月１７日（土曜日）　１７：００～２１：００
＊７月１８日（日曜日）　１６：００～１９：００

会　場

＊鉢山中学校地下体育館（無料）

主催　代官山ファンイン　代表　只木 一行
協力　たけのこの会　代表　松下 浩市
鉢山中学校施設開放運営委員会・鉢山中学校
青少年対策恵比寿地区委員会

4.青少年リーダーの活動

文部科学省
2010 年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究
地域における青少年育成活動の可能性
「代官山ファンイン」による「お化けプロジェクト」事業における青少年リーダー育成と、地域の多様な社会資源の協働の可能性に関する調査研究
調査研究報告書Ⅱ

発　　行：2011 年 3 月
発　行　者：特定非営利活動法人ピアサポートネットしぶや
調査研究委員会